

西田中遺跡

藤原宮造瓦所の調査

2000. 6. 30

大和郡山市教育委員会

目 次

| | |
|----------------|-----|
| 1, 西田中遺跡とそのまわり | 1頁 |
| 2, 西田中遺跡の調査概要 | 3頁 |
| 3, 主な検出遺構と遺物 | 6頁 |
| 「瓦工房の時代」 | 6頁 |
| 「ムラの時代」 | 22頁 |
| 4, おわりに | 32頁 |

例　　言

1.本書は、大和郡山市新町地内において実施した、市営住宅建設に伴う発掘調査の概要報告書である。

2.発掘調査は、1997年から2000年にかけて行われた。

1997年9月16日～1997年10月30日　　試掘調査

1998年8月20日～1999年6月30日　　第1次調査

1999年7月1日～2000年5月31日　　第2次調査

3.発掘調査は、大和郡市教育委員会社会教育課文化財係、濱口芳郎が担当した。

4.発掘調査には、以下の諸氏の参加を得た。

浅井康春 市井義治 金浜昭八 川合康弘 喜多美寿子 北村幸信 杉岡雪子 杉山典三 寺西忠 中尾三郎 藤川ミツエ

堀川正治 山中剛 山村春雄 米田郁子 米田利男

阿見雄之 北代陽子 佐野陽子 山川俊一郎 矢戸美雪 青木智史 井殿加奈子 江波大樹 楠京子 小林祥子

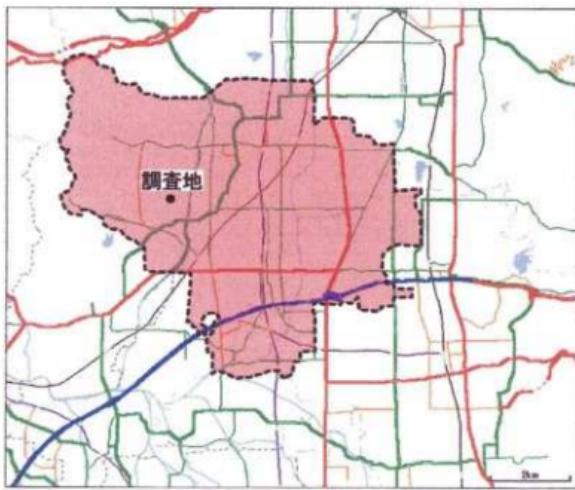
後藤峰昭 長田賢二(以上奈良教育大学) 小野唯由美(奈良大学) 浅川梨絵(京都外国语大学) 植村藍(近畿大学)

山村昌宏(関西大学)

5.本調査地内で行った電気探査については、桜小路電機、工藤博司氏の協力を得た。また粘土及び瓦の成分分析には奈良教育大学教授、三辻利一氏の協力を得た。

6.本書に掲載した航空写真は、国際航業株式会社が、地上写真、遺物写真は濱口が撮影した。

7.本書の執筆、編集は濱口が担当した。



1.西田中遺跡とそのまわり



西田中遺跡は、矢田丘陵から東へ派生する低丘陵上の北端に位置します。調査地は、丘陵北端の北東に緩やかに傾斜する斜面地と、西の谷部にあたります。調査地のごく至近の距離に西田中瓦窯推定地、内山瓦窯があります。これらの窯も含め周辺の主要な遺跡を簡単に紹介します。

西田中瓦窯

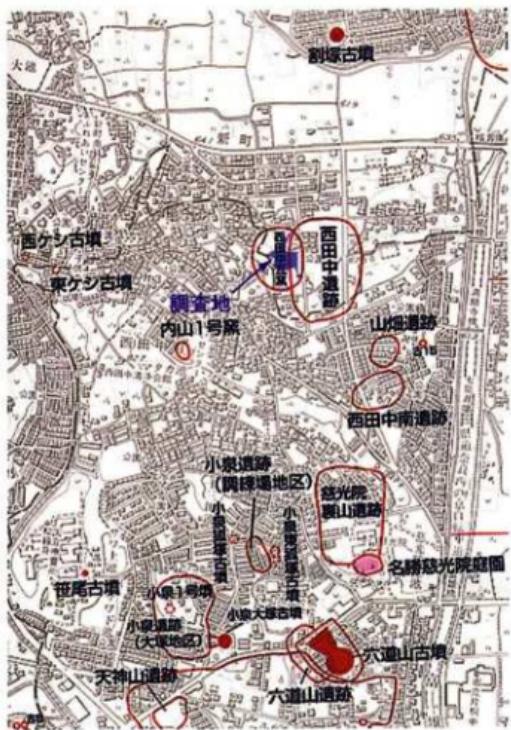
戦前に発見された瓦窯で「考古学雑誌」21巻11号に簡単な報告が載せられています。窯の構造などがわかる写真や図面は、公にはされていませんが、出土した瓦は藤原宮で使用されたことが、その後の研究で明らかになりました。

内山瓦窯

1993年に大和郡山市の試掘調査で発見された瓦窯です。その後の調査で合計4基の窯の存在が明らかになりました。窯の構造は斜面に瓦を敷き、階段状にした有段式窯窓です。西田中瓦窯と同じ瓦を焼いており、やはり藤原宮に供給していました。

割塙古墳

直径49m、高さ4.5mの片袖式の横穴式石室をもつ円墳です。石室には、朝抜式家形石棺を据えており、棺内から獸首神獣鏡、重飾付耳飾、水晶製切子玉、碧玉製管玉などが出土しました。また、棺の外には馬具、甲冑、鎌、須恵器がおかれていました。



西田中遺跡周辺の遺跡

慈光院裏山遺跡

西田中遺跡と同様の丘陵上にある弥生時代中期の集落です。今まで2度の発掘調査が行われ、円形の竪穴住居が数棟見つかっています。また、古墳も中期のものが3基確認されています。

小泉遺跡調練場地区

小泉東狐塚古墳を調査した際、その墳丘から弥生土器が出土したことから存在が明らかになった遺跡です。

小泉遺跡大塚地区

小泉大塚古墳の西に隣接して存在する弥生時代後期の集落です。4棟の竪穴住居が見つかりました。内3棟は同じ場所で立て替えられたものです。また、古墳時代前期末頃の円墳も1基確認されています。

小泉狐塚古墳

直径22mの古墳時代後期の円墳です。1962年に調査が行われ、天井石などは失われていましたが、両袖式の横穴式石室を確認し、鏡、耳環、馬具、須恵器の出土を見ました。石室の北には小さな石室と埴輪円筒棺が検出されています。この古墳は、その後の造成工事のため破壊されました。

小泉東狐塚古墳

全長38mの前方後円墳です。発掘調査の結果、埋葬施設はありませんでした。墳丘が削られたためか、あるいはもともとなかったものかよくわかりません。なお、この古墳も調査終了後つぶされました。

小泉大塚古墳

全長88mの前方後円墳ですが、前方部はすでに失われています。後円部の埋葬施設は1962年と1996年に行われ、竪穴式石室の中から鏡、剣、刀子、鉄斧、土師器などが見つかっていて、古墳時代前期の古墳と見られます。

六道山古墳

全長約100mの前方後円墳ですが、前方部は失われています。墳丘や周庭帯の一部のみで調査が実施されていますが、埋葬施設などは調査されていません。墳丘より出土した遺物から、古墳時代後期の古墳である可能性が高いようです。

笹尾古墳

国立療養所内で宿舎の建設工事の際に見つかった古墳です。直径27mの円墳で横穴式石室を持ちます。石室の中から石棺の破片、鉄釘、須恵器などが出土しています。この古墳は保存され、現在、大和郡山市内で唯一石室を見学できる古墳です。

次に、西田中遺跡においてこれまでの調査について簡単に紹介しておきます。今回の調査地東側で西田中・小泉線の道路建設に伴う調査が、1983年と1984年の2度にわたって行われました。83年度の調査によって調査範囲の南半では顕著な遺構が検出されず、北半部分で竪穴住居2棟と住居に伴う炉跡、溝、ピットなどを検出しています。竪穴住居の内1棟は隅丸方形を呈し、住居中央の炉跡と見られるピットから住居の外へ伸びる溝があります。このような住居址は、今回調査したものにも見られます。また、古墳時代後期の包含層も一部で検出していて、これも今回の調査でも確認しています。84年度の調査では、直径約8mの2棟の円形竪穴住居が重複して検出されました。後出の住居址は焼失したようで、埋土に炭化物や焼土塊が多く含まれていました。

2.西田中遺跡の調査概要



1998年8月20日より2000年5月31日までの調査によって、大きく分けて3つの時代の遺構が確認されました。前章で紹介した以前の西田中遺跡の調査結果と同様に、弥生時代中期の遺構、古墳時代後期の遺構を検出し、そしてそれに加えて、今回新たに7世紀後半の遺構を見つけることができました。最も時代の古い弥生時代中期の遺構は以前の調査と同じように、竪穴住居を中心とした集落の跡で、本調査地内西側の谷までがこの集落の範囲であったことが明らかになりました。次に古い時代の古墳時代後期の遺構は、前回の調査ではわずかに溝を検出しただけでしたが、今回の調査によってこの時代にも集落があったことがわかりました。そして今回新たに見つかった7世紀後半の遺構が、この時期のこの地域を特徴付ける重要なものでした。前章で、附近に藤原宮の瓦を生産した窯跡が2ヶ所あることを紹介しましたが、その窯跡と同じ時代、すなわち7世紀後半のものと見られる大型の建物群が見つかったのです。

これらの遺構についてくわしく説明する前に、この調査がどのように進められていったかをまず、紹介しなければなりません。この調査地で最初に調査を行ったのは1997年のことで、市営住宅の建設が計画されている11,000m²の範囲内に、遺構がどのように残っているかを確認するため、トレンチと呼ばれる溝を6ヶ所に設定し、それぞれのトレンチ内を発掘調査しました。調査期間は9月16日から10月30日まで、実労は25日でした。試掘調査の結果、第1トレンチと第5トレンチで顕著な遺構が確認され、低丘陵の北東に下がる緩斜面上と低丘陵より西の谷に下がる斜面地に、遺跡の範囲が限定されることがわかりました。一方、谷底には顯著な遺構も、明瞭な遺物包含層も見当たりませんでした。ただ、西田中瓦窯推定地に最も近い第6トレンチでは、若干の瓦を包含する堆積層を確認しました。

試掘調査の結果を踏まえ、1998年8月20日より本調査を開始しました。本調査は、先に述べたように第1トレンチを設定した低丘陵上と、第5トレンチを設定した西側の斜面上に約2,700m²の調査区を設け、重機により表土を除去、以下の層を人力によって掘削しました。調査区の大部分では、表土直下に遺構を確認し、部分的に遺物を含む堆積層が認められました。特に、丘陵上の調査区内で最も低い部分である北東隅では、およそ80cmも遺物包含層が堆積していました。



重機掘削がほぼ終了し、遺構精査を調査区の中央部で進めていた頃、大型建物が姿を現し始めました。しかし規模があまりにも大きく、その全体像を把握するには、かなりの時間を要しました。10月の終わり頃、ごく新しい穴や溝の掘削を終え、再度遺構の精査を行った結果、はじめて4棟の大型建物を見出すことができました。しかし、建物全体を検出できたのは1棟だけでした。大型建物の名称は、確認した順番に大型建物1、大型建物2と命名していきました。調査は順調に進みましたらが遺構の量があまりにも多く、また複雑に重なり合っていて、年が明けた1999年1月の段階でまだ、半分以上の遺構が手付かずのままでした。航空測量の時期も追り、到底1998年度中に調査を完了できないことが明白となりつつあった、2月の初旬に事業課である住宅課と交渉し、1999年度に引き続いて調査を行うこととなりました。その際、調査地内で建物の大きさを明らかにできそうな2棟、大型建物1と大型建物3については調査区を拡張して、その確認を行うこととしました。重機掘削の開始は1999年7月16日からとなりました。調査区の拡張は、大型建物1については南端の柱列確定のため、建物の存在が予想される部分を約5m南に広げ、南端の柱列を全て検出しました。大型建物3は北に伸びる谷の崖上の平坦面を、柱穴を確認しつつ拡張していきました。約15m北へ拡張した時点で建物北端と思われる柱列を検出ましたが、柱列がそれ以上北へ続かないことを確認する必要があり、そこからさらに5mほど北へ掘り進みました。すると新たな建物の柱穴が検出され、柱穴の大きさから、これまで検出した大型建物と同様の建物である可能性があり、この建物（大型建物5と命名）の規模をも確認する必要性が生まれ、結局、拡張可能な最大限の範囲、約50mを掘削することとなりました。これらの拡張によって調査区の面積は3,215m²になりました。

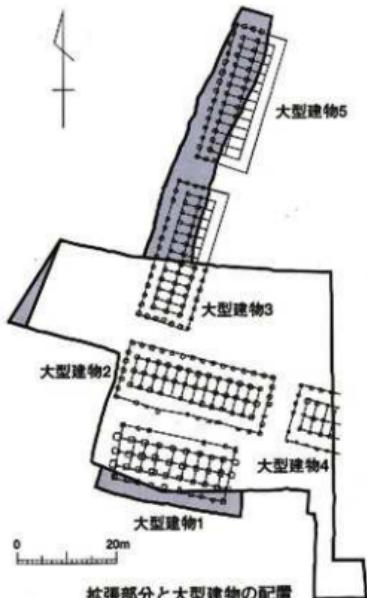


調査区拡張前(左:1999年3月12日撮影)と拡張後(右:2000年3月22日撮影)

遺構の掘削は、拡張した部分より始め、大型建物の柱穴と重複した遺構を除き9月頃にはほぼ完了しました。引き続き、昨年度の調査未了部分に着手しました。本来なら上層にある大型建物の柱穴を掘削、断面図等を作成して調査終了後、下層の遺構なり、包含層なりを掘削していくのですが、遺構の重複の著しい本調査区では、大型建物の重要性を考慮し、柱穴の掘削は最小限に止めることとしたため、柱穴を残しつつ、部分的に下層を掘下げるように作業を進め、遺構の掘削作業、作団作業は遅々として進みませんでした。結局、大型建物4を除いて、2000年3月22日の航空写真撮影までに大型建物の調査を進めることはできませんでした。航空写真撮影の後、引き続き地上写真を撮影し、完了後、大型建物2東半の柱穴の掘削と包含層の掘下げを並行して行いました。また、他の大型建物でも必要最小限の柱穴の半数を行い、5月31日をもって調査を終了しました。

主な検出遺構は、大型建物が5棟のほか、堅穴住居が20棟、掘立柱建物18棟、瓦工房に伴う粘土採掘場、粘土貯蔵加工施設、大型建物建設のための足場と見られる柱列などがありました。集落に伴う施設としては、流路内に掘られた貯水穴、土器などを捨てた穴などが見つかっています。

なお調査期間中、調査地拡張前に大型建物1の未検出部分の柱穴遺存地域において5月3日、6月30日、7月10日の3度にわたって、奈良教育大学古文化財専攻の学生有志諸君等による実地研修とデータ収集を兼ねた、電気探査を行いました。



拡張部分と大型建物の配置



奈良教育大学の有志諸君



学生諸君による電気探査作業風景

3. 主な検出遺構と遺物

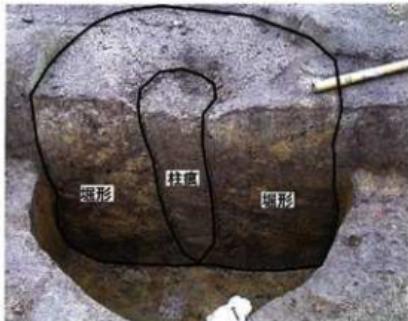


先の章でも述べたように、この調査では大きく3つの時代の遺跡が重なっていることが明らかになりました。それは弥生時代中期の集落、古墳時代後期の集落、そして7世紀後半の瓦工房跡とみられる施設なのですが、出土した遺物等の整理も含めまだ検討すべきことが多數あり、これから説明することも今後、訂正や追加しなければならないでしょう。この章ではこれまでに明らかになったことに、現段階での調査担当者の想像を交え説明していきたいと思います。まず、時代の最も新しい瓦工房の時代から始めましょう。

「瓦工房の時代」

長辺30m前後の大きな総柱の掘立柱建物が、北を上にしたL字状に、南北棟2棟、東西棟3棟配置されています。建物はすべて、西側の谷の方向を基準に建てられており、真北に対して約20° 東に傾きます。5棟の建物はすべて、身舎の部分と庇の部分にわかれることができます。それぞれの建物には、ごく至近の距離に白色の粘土で埋められた溝状遺構、あるいは土壙が存在します。柱穴や白い粘土の溝・土壙からは古代瓦が出土しています。

この時期建物を建てる際、掘形と呼ばれる、柱を据えるために方形の大きな穴を掘ります。ここの大規模建物の場合、最大のもので一辺1.2m、最小で80cmほど、大体1m前後の穴を掘り、そこに柱を据え穴を埋めます。柱自体は腐って無くなっていましたが、その痕跡が土質の違いとして痕跡となって残っていました。これを柱痕と呼びます。この柱痕の直径は15cm～20cmであることから、本来の柱よりもやや細くなっているかもしれません、柱の太さも大体このようだったと考えられます。





深い掘形



浅い掘形

この時代の大きな建物では柱の底の部分は普通平らなのですが、こここの建物の場合、平らなものもありますが中に尖ったものも見られます。また、柱の掘形の形は方形が一般的で、ここでも方形のものがほとんどですが、中に円形や椿円形のものもあります。建物専門の工人に混じって、瓦工人が手伝ったのかもしれません。

大型の建物が、瓦工房といわれている遺跡で見つかった事例はそれほど多くはありません。それだけ大規模に瓦を作る事業、つまり宮都や大規模な寺院の造営に使用された工房の跡がほとんど見つかっていないからです。宮都の造営に関連する瓦工房跡は、後期難波宮の瓦を作っていた大阪府吹田市の七尾瓦窯や、平安宮の瓦を作った同じ吹田市にある吉志部瓦窯などで見つかっていますが、京都府相楽郡木津町にある上人ヶ平遺跡で見つかった4棟の大型建物が、その唯一の事例です。この遺跡では平城宮の瓦を作っていました。一方、正倉院に残されていた奈良時代の東大寺造営に関係する記録『造東大寺釋解』の中にも瓦工房に大きな建物があったことを記しています。瓦葺の建物を初めて採用した藤原宮では、それ以後の宮都造営に際し、近傍に造瓦所を設置するとの異なり、西は香川県から、東は滋賀県など西日本各地で生産された瓦を使用していたと考えられています。無論、奈良県内にも数ヶ所生産した窯が見つかっています。当然、それだけ生産地が分散していて、また平城宮に比べ、使用した瓦がかなり少ない藤原宮で、これほど大規模な施設を作ったなどとは筆者は想像もしていませんでした。



柱の立て方

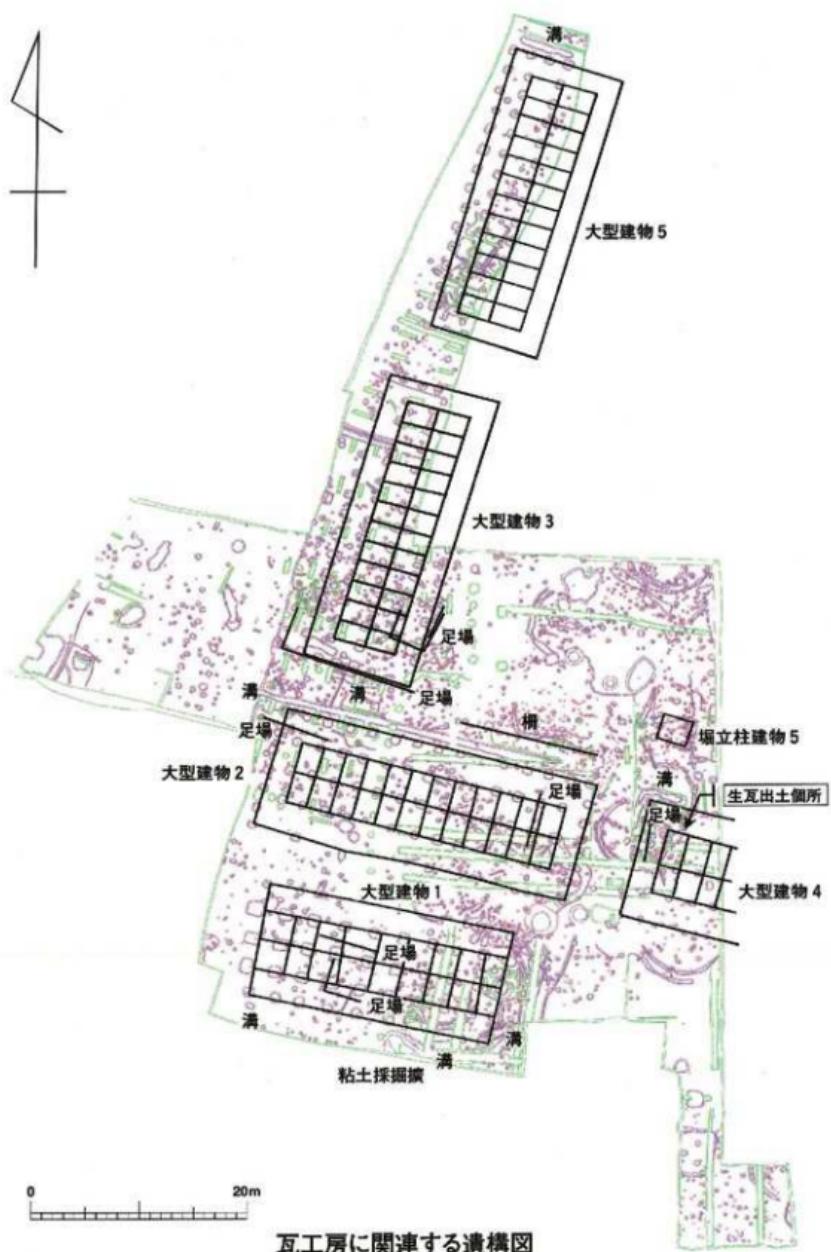
①柱穴を掘る



②柱を据える



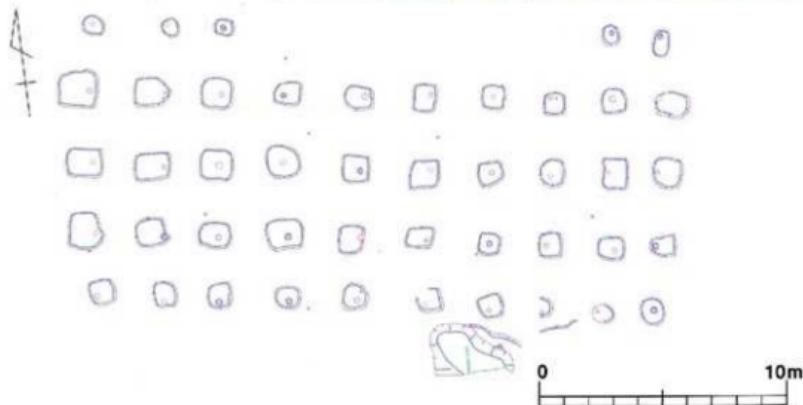
③掘形を埋め、地固めをする



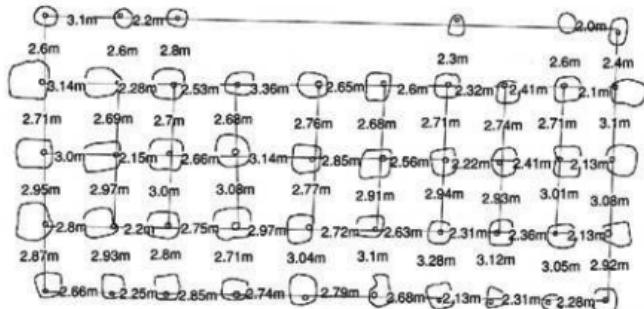
瓦工房に関連する遺構図

大型建物1

大型建物1は、調査区南端の緩斜面上のもっとも高所に位置します。東西棟の縦柱建物で建物の平面プランは、身舎が梁行2間、桁行9間、南と北にそれぞれ9間の庇があると考えています。南と北の柱列を庇と想定する理由は、建物の西側において、身舎と見られる中央の3列分の柱穴掘形が、（この掘形はほかのどの柱穴より大きく、一辺約1.2mにもおよぶのですが、）南北両端の柱列と大きさに顕著な差を見せることによります。ただ東の方の柱穴ではさして顕著な差はありません。また、大型建物3や5では、梁方向の中央の3列の柱穴同士の間隔と両端の庇柱穴との間隔に顕著な差があって、身舎と庇とに区別できるのですが、この建物や、大型建物2については柱の間隔によって明確にすることはできません。なお南庇の中央の柱5本分は削平されたためか、確認されませんでした。



大型建物1では、平面プラン以外にも特徴が認められます。そのひとつは、柱穴掘形の大きさが他より大きいこと、特に西端へ行くほど大きくなる傾向があります。ほかの建物では、柱穴の形にやや違いはありますか、大小の差はそれほど顕著ではありません。もうひとつは、柱の並びがかなり不揃いなことです。特に東側3間分と、それより西側では東西方向の柱間隔に最大1mもの差が認められ、東側の間隔は、ほかの4棟の大型建物と共にし、そのことから大型建物1は2棟の建物であったか、あるいは増築された可能性もあります。また、それと関連することで柱痕が西側では東に寄り、東側では西に寄る傾向があり、柱の割付が、中央から東西方向へというやり方で行われたと見られます。さらに詳細に見ると西端より3・4列目は掘形の中央に柱があり、その西2列分が東に寄ること、そして東から3・4列目が中央でその東2列分が西に寄り、西の2列分が東に寄って、複数建物説を示すようでもあります。このようなことは、ほかの建物より先行して建てられたための試行錯誤の結果とも解釈できます。

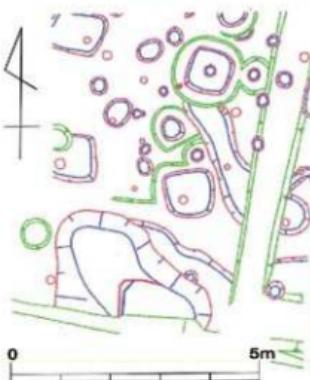


大型建物1全景
(北西より撮影)



大型建物1を復元してみました。東西の庇がないので切妻にしました。北に下がる斜面上にあるため床下の柱の長さが異なります。なお、これを含めすべての復元図は調査結果に基づいた筆者の勝手な想像です。

大型建物のすぐそばには、白い粘土で埋められた溝状の遺構が見つかっています。大型建物 2 に伴う溝以外は、深さ、5 ~ 15cm程度のごく浅いものです。大型建物 1 では白色粘土で埋設された溝状の遺構が建物の南東隅と南西隅の合計 3ヶ所で検出されています。溝はいずれも建物の隅に近い位置で見つかっていて、一部は柱穴の掘形上に存在するものもあります。溝は南西、南東の隅に長さ、1 ~ 5 m程度のものです。南東隅の南北方向の溝から瓦の破片が出土しました。このような溝は、大型建物 3・4・5 にはまだ存在する可能性もありますが、現段階では、ほかの 4 棟では 1ヶ所ずつしか認められていません。



これらの溝とは別に、大型建物 1 南側には白色の粘土で埋設された方形の土壤が検出されています。当初 1つの穴と見ていましたが、掘削した結果、東西 2.5 m、南北 2 m以上、深さ 0.8m の穴と、東西辺 2 m、南北辺 1.5m 以上、深さ 1.8m の 2つの穴が、重なっていましたことがわかりました。下の穴は、地山の粘土層をえぐり込むように掘られており、瓦の材料となる粘土を採取した粘土探掘壕と見られます。このような施設は調査区内ではここしか見つかっていません。



瓦工房とされる遺跡では、採掘した粘土を練り上げたり、貯蔵したりするための施設が確認されています。上の穴は、このような施設であると考えられます。ただ、このような構造は、この調査区内にもっと多く認められてもよいように思いますが、この遺跡では、ここ1ヶ所しか見つかっていません。なおこの2つの穴からは、それぞれ古代瓦の破片が出土しています。

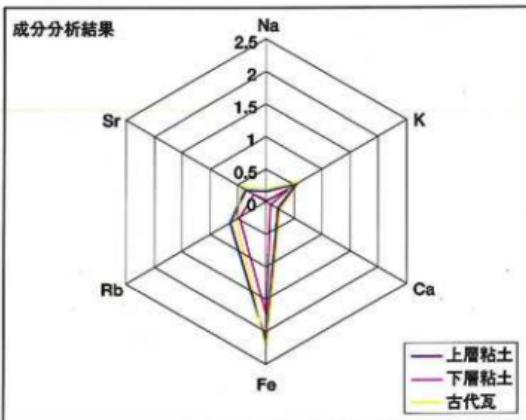


白い粘土の穴埋土の成分分析

白い粘土の穴の掘削と断面図の作成を完了した段階で、断面写真に記された2ヶ所、上の赤丸は白い粘土の穴の埋土、下は自然堆積の白色粘土、そして発掘調査で出土した古代瓦4点の成分を分析してみました。分析は奈良教育大学で行っていただきました。分析の結果、下のグラフを見てもわかるように白い粘土の穴の上層粘土と古代瓦の線が重なり合っていて、その成分がほぼ一致しています。そしてこのことから、この埋土が瓦製作のために採取され、練られたものである可能性が非常に高くなりました。また、埋土の粘土は、ここに自然堆積している白色粘土に混ぜ物をした可能性を示しているようです。



採取した粘土 資料を採取した場所



大型建物2

大型建物2は大型建物1の北に位置する東西棟の建物で全長30m、全幅12mを測ります。平面プランは身舎の梁行2間、桁行12間、庇の梁行6間、桁行14間です。西と東の庇柱列を除くと、身舎も庇も柱の間隔に差がなく、梁方向の間隔が3m、桁方向の間隔は2mほどです。このあと説明する大型建物3・4・5も同様のプランだったと思われますが、これらは梁方向の間隔において顕著な差が見られるようになります。大型建物2の東半部の柱穴は包含層上より穿たれており、この包含層はおそらく建物建設のため整地されたものと思われます。包含層からは弥生土器に混じって古墳時代後期の須恵器も出土し、その土には白い粘土も含まれていてました。同様に建物を建てる際、整地を行ったと見られる部分は、大型建物4と大型建物5に見られます。建物の柱穴掘形・柱痕から古代瓦が出土しました。



大型建物2全景
(南より撮影)



大型建物2全景
(上が北)



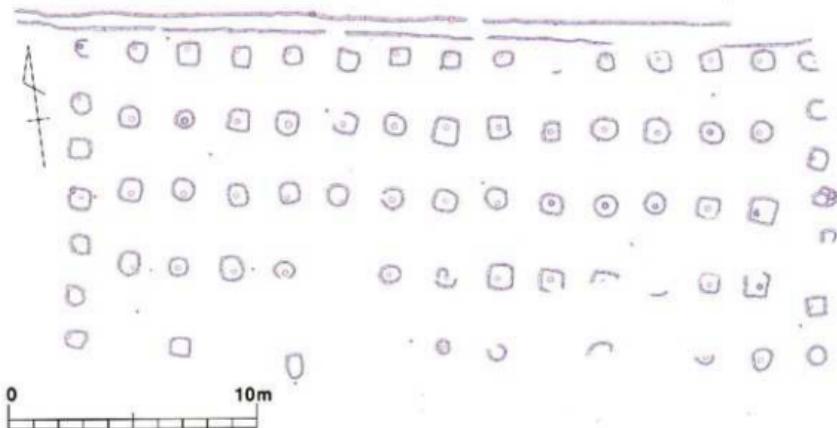
柱痕から出土した平瓦



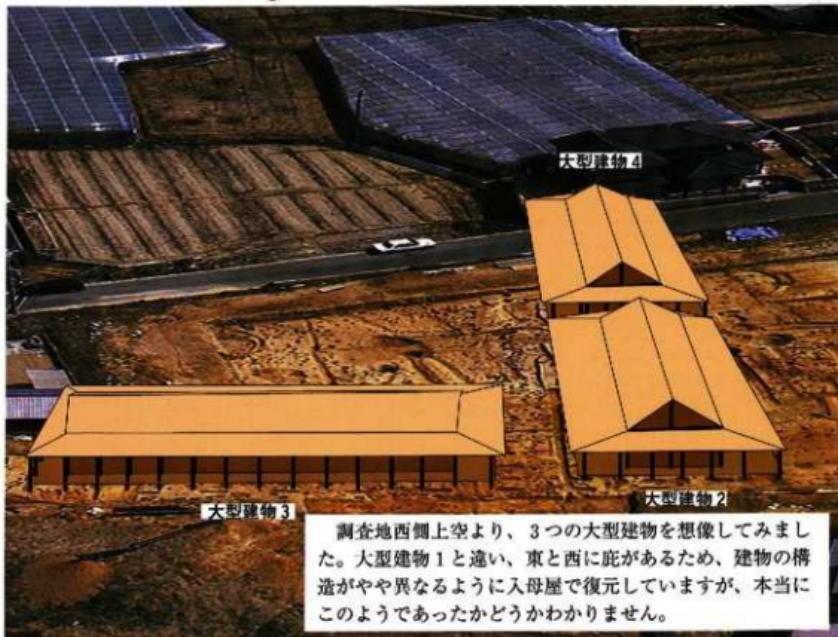
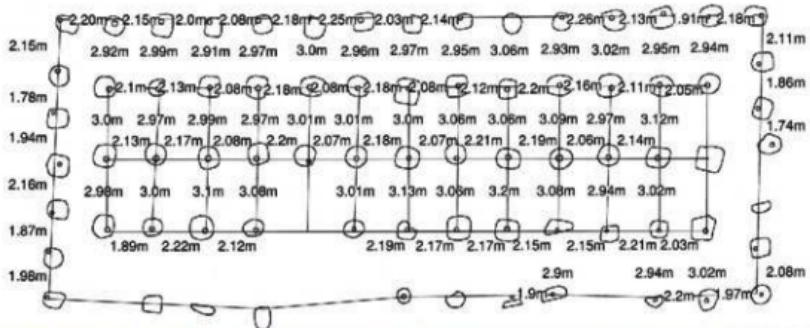
包含層の掘下げ



包含層に混じる白色粘土



大型建物 1 の東西両端の柱列と大型建物 2 の身舎の東西両端の柱列はほぼ一線に並びます。これは先に推定のとおり大型建物 1 が最も先行して建てられたとすれば、その東端と西端を基準に大型建物 2 が大型建物 1 と同じく南・北庇のみの建物として計画され、東・西の庇はその後に付け加えられた可能性があるわけです。梁方向の庇の柱の数の違いは建設完了後、東西両端の庇が後に付け加えられたことを示すようでもあります。そして、大型建物 2 の西庇列と大型建物 3 のそれはやはり一線に並び、しかも平面プランが同じであるため、大型建物 3 は当初からこのプランを採用していたことになります。大型建物 2 の東と南の庇柱列は部分的に一線に並ばないところもあり、また、大型建物 1 同様、梁方向で身舎、庇の間隔差がないことから、大型建物 1 と 3 の間に位置付けることができます。



大型建物2でもっとも特徴的な点は、建物北側にコの字状に建物を囲むような白色の粘土で埋められた溝が存在することです。前述のように5棟の建物にはこのような溝が伴いますが、いずれの溝も全長、深度においてはるかに小規模です。この溝の全長は37m、幅0.8m、最深部の深さは0.5mを測ります。溝の埋土から瓦当の剥離した軒丸瓦が、ほぼ完形で出土しています。

この溝は、どのような施設だったと解釈すればよいでしょうか。この溝は先に述べたとおり、全体が白色粘土で埋設され、流水、あるいは貯水の痕跡が見出せません。そのことは少なくとも、水に関わる施設ではなかったことを示します。先述した大型建物1南側の穴の内、上層のものは、形状や埋土の成分分析から瓦作りのための粘土を捏ね、一時的には貯蔵する施設であろうと推定しました。この溝も性格的には同様の施設ではなかったかと想像します。



大型建物2
白い溝の全景



白い溝
西端の検出状況



白い溝出土の軒丸瓦



軒丸瓦出土状況



表面



瓦当の剥離状況
玉縁裏面の焼記号



裏面

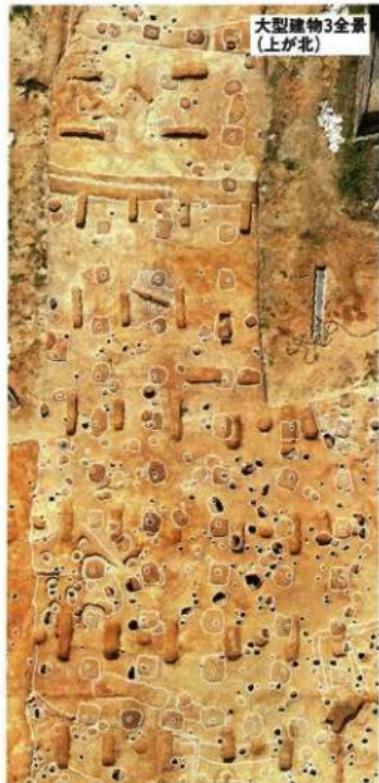


大型建物3

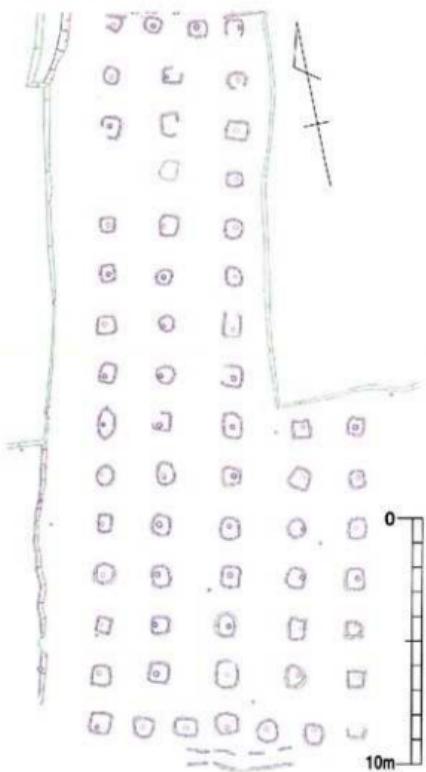
大型建物2と同様の平面プランと思われる南北棟の建物ですが、東と北庇の柱10ヶ所と、身舎の東列の北半の柱穴7ヶ所分は調査区外にあり、確認していません。全長29m全幅11m、身舎の長さ24.7m、身舎の幅6mを測り、桁方向の全ての柱間隔がやや狭くなり、梁方向の身舎と庇間の間隔が狭くなつたことによって、大きさは大型建物2より少し小さくなっています。大型建物2との間隔は約6mになります。



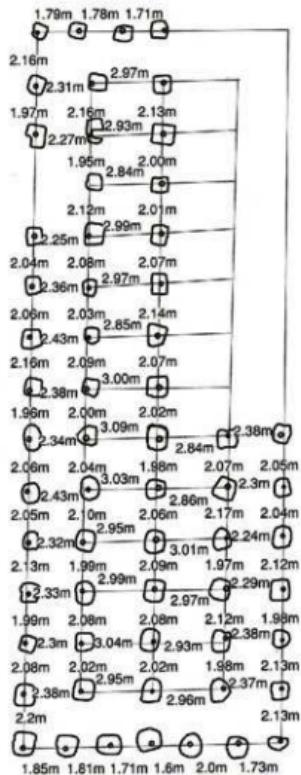
大型建物3全景
(南西より撮影)



大型建物3全景
(上が北)

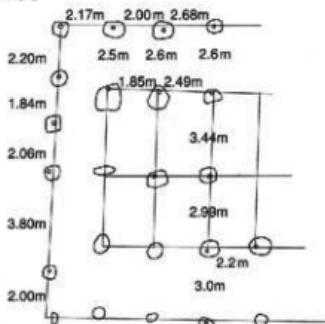
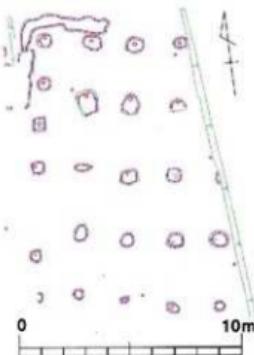


大型建物3 南側約0.6mのところに長さ6m、最大幅1.2m、深さ5cm程度の白色粘土の溝が伴います。大型建物2北の溝との間隔は、約5mです。庇柱穴をすべて検出したわけではありませんが、庇列に大型建物2のようなズレが見られず、より整ったあるいは、後出的な印象を持たせます。これは、この平面プランを地形的に、あるいは機能的に改良した形となったことを意味します。この印象は大型建物5にも共通します。



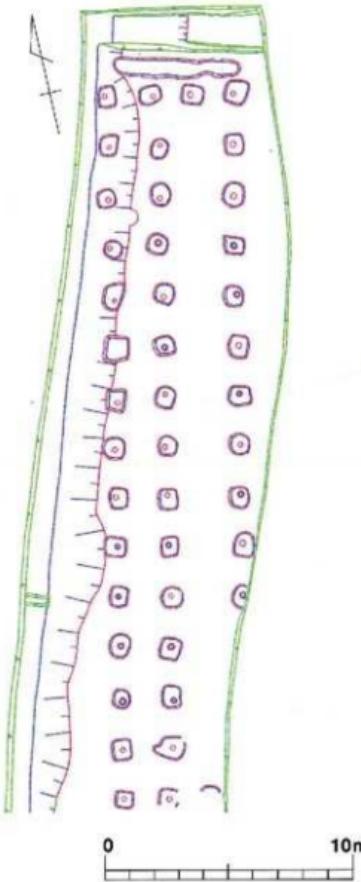
大型建物 4

建物の大半は調査地外にあり、全体の3分の1程度、西端から3~4問分を検出したに過ぎませんが、東西棟の建物と思われます。全幅12m、身舎幅6.5mを測ります。北庇と身舎北列の柱穴は非常に浅く、検出面よりの深さはわずか10~20cmほどでした。すぐ北側の身舎中央列の柱穴が、深さ80cm程度であることを見ると、本来は斜面で50~70cmほども削られたと考えざるを得ないようです。また、南庇は北庇に比べ、身舎との間隔が広くなります。これは大型建物2の特徴を残し、大型建物2と3の間に位置付けられそうです。北庇柱列は、大型建物2のそれとほぼ一線に並び、ここを基準に建てられたようです。北西隅に白色粘土の溝が伴います。この建物は、住居址6と重複しており、住居廃絶後かなり時間は経っていたのですが、庭地になっていたらしく、土を入れて平らにしたようです。

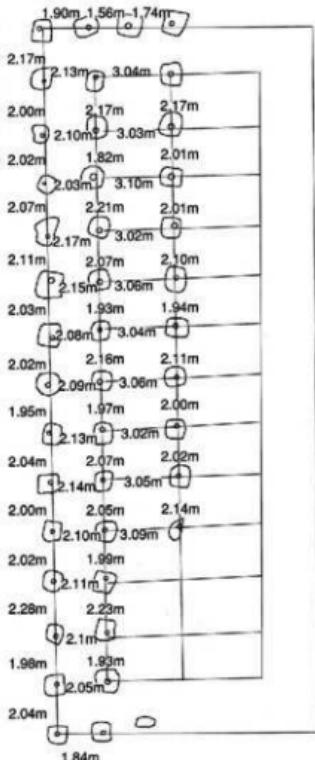


大型建物 5

大型建物 5 は北側の拡張区で検出された南北棟の建物です。大型建物 2 と同じ平面プランになるようですが、東の庇柱列と身舎の東柱列のすべてと身舎の中央柱列の南の 3 本分、南・北の庇柱列の一部が調査地外にあり、検出していません。この建物はもともと西側の谷と、確認はしていませんが、大型建物 3 東側の段差の延長線上に、はさまれた狭い平坦面に計画され、東側の状況はよくわかりませんが、西側の斜面については盛土を行い、平坦面を拡張しています。しかも大型建物 2・3・4 についてはすでに何度か触れていましたが、2 と 3 は西の庇柱列を、2 と 4 では北の庇柱列を描えるようにしていました。この建物では西の斜面を避けるため、西庇柱列と大型建物 3 の身舎の西端の柱列とを描えて建てられています。それでもこの狭い平坦面に収まりきらず、西庇柱列の北端の 5 本分の柱は斜面上に立てられていました。この建物では、北庇柱列の至近の距離に白い粘土の溝がありました。長さは 5.2m、幅は 0.8m、深さは 15cm 程度です。また、大型建物 3 との間隔は約 6m です。



大型建物5を建てるための整地は、本来の斜面を埋め立てるように行われていました。大型建物と白い溝を避けて、調査区北端でこの整地上を掘下げてみました。大型建物2や4の整地土は、遺物をかなり含んだ細かい土であったのですが、ここの土は、遺物はそれほど含まず、礫や石を多く含みます。整地の厚さは斜面上であるため西側と東側ではかなり差があるのですが、東側のもっと薄い部分で約10cm、西側のもっと厚い部分では約1mに達します。



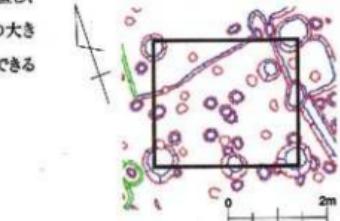
工房に伴うその他の建物

大型建物以外で工房に伴う建物の存在は、明確にはなっていません。掘立柱建物自体は数多く見つかっていますが、そのほとんどは、大型建物と重なり合っていて、大型建物より古い時代のものです。建物同士が重なり合わず、かつ建物の方向が一致することから、その可能性のある建物は、掘立柱建物5のわずか1棟のみなのですが、この建物からは、時期決定ができる遺物は出土しませんでした。掘立柱建物5は大型建物4の北に位置し、2間×2間の平面プラン、1辺3mの正方形を呈します。この建物はその大きさに比べ柱穴掘方は大きく、直径50cm～80cmほどあり、柱痕の確認できるものもありました。



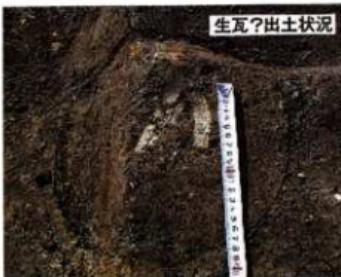
大型建物の足場？

大型建物1や2などでは、柱列に並行して20cm～40cmほどの小さな穴が列になって検出されています。当初は別の掘立柱建物かとも思われましたが、どうもうまく建物跡としてまとまらず、横のような施設のようです。穴の中からは、時期を決定付けるような遺物の出土は見られず、推測の域を出ないのですが、大型建物を建ててるための足場の跡ではないかと思われます。そのような視点で見ると、柱穴を囲むような小穴もあちこちで見られます。



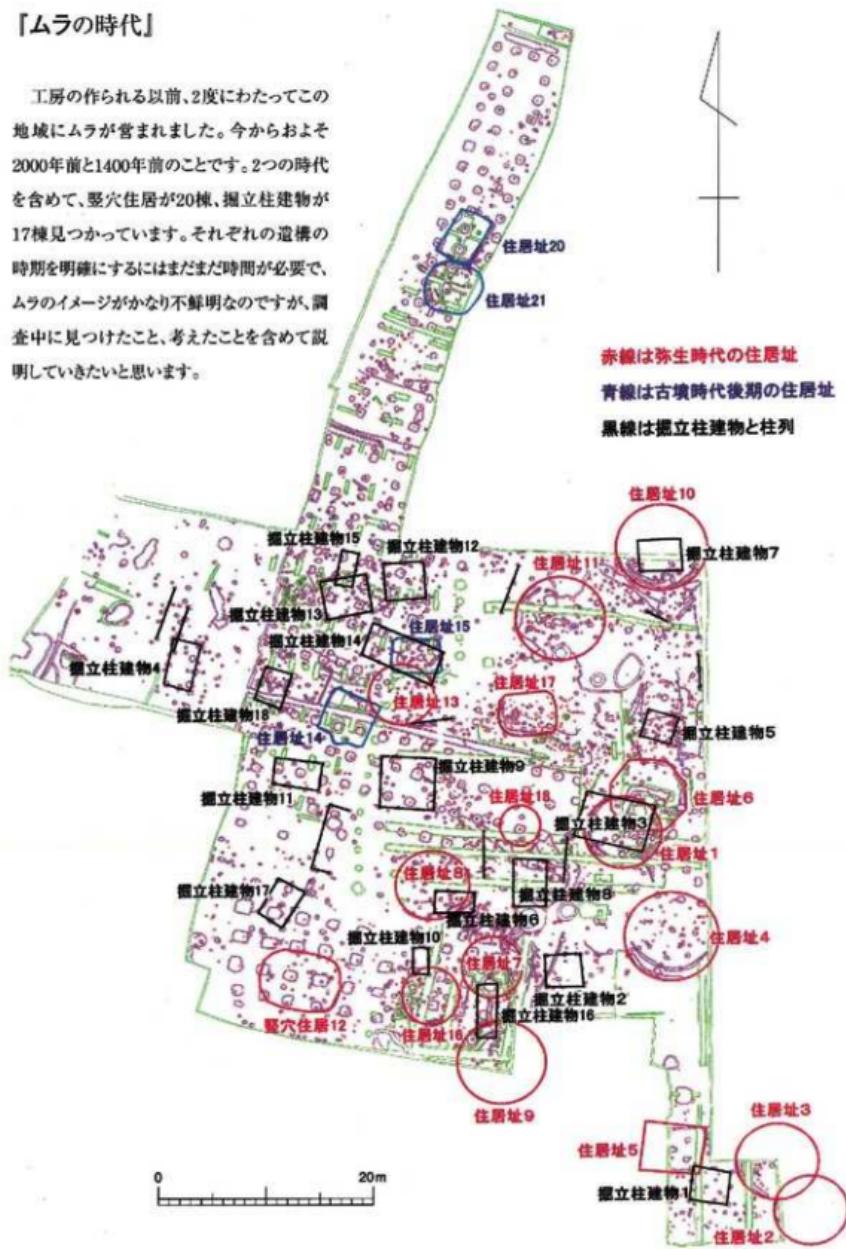
生瓦？

大型建物4の柱穴のすぐそばで見つかった小穴を精査していると、厚さ1.5cmのやや弧を描く板状の粘土の塊が出てきました。その形状は平瓦そっくりなので、焼く前の瓦「生瓦」ではないかと思われました。凸面に縄叩きの痕跡、凹面に布目の痕跡がないか土を落として観察を試みましたが、表面は細かくひび割れていてよくわからず、また、土をはずすとこの塊自体が崩れてしまうので観察は断念しました。



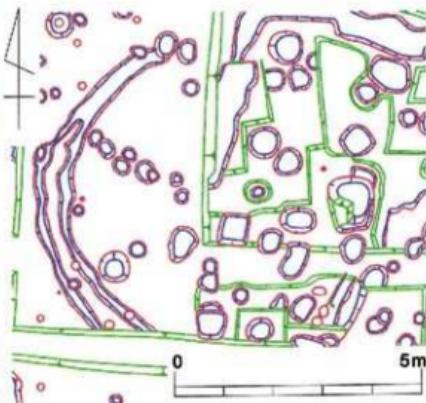
「ムラの時代」

工房の作られる以前、2度にわたってこの地域にムラが営まれました。今からおよそ2000年前と1400年前のことです。2つの時代を含めて、竪穴住居が20棟、掘立柱建物が17棟見つかっています。それぞれの造構の時期を明確にするにはまだ時間が必要で、ムラのイメージがかなり不鮮明なのですが、調査中に見つけたこと、考えたことを含めて説明していきたいと思います。



住居址1

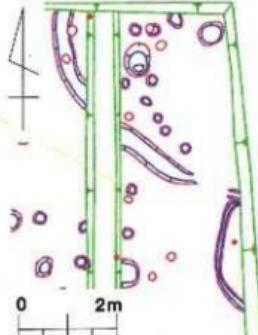
1997年の試掘調査で西側半分だけ検出した、円形の住居址です。直径は7mで、本調査によって住居址6と部分的に重なっていることがわかりました。南西部分は幅15cm程度の2重の周溝を、他の部分は幅30cmの周溝を巡らせ、北端部分には排水のため北に伸びる溝を確認しています。



住居址3

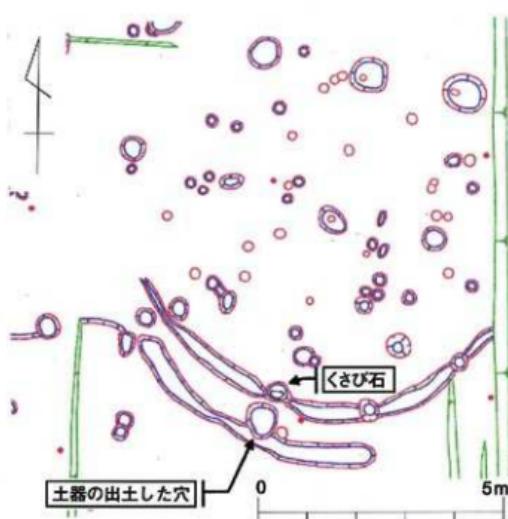
調査区南端の、もっとも高い位置で検出された円形の住居址です。全体の4分の1程度を確認したに過ぎませんが、直径はおよそ8mほどです。周溝は1重で、その内側の穴の1つからは「くさび石」と呼ばれる、柱を固定するための石が出てきました。

調査区東壁面に見える円弧状の小溝も竪穴住居の周溝の一部と見られ、住居址2と命名しています。住居址3の周溝と切り合いが認められ、3のほうが新しい住居です。



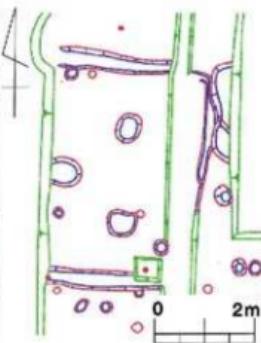
住居址4

新しい時代に北半分が削られてなくなっていますが、直径がおよそ8mの大きな円形の住居址です。部分的に2重に周溝を巡らせています。周構内に掘られた穴からは弥生土器の底の部分が出土しています。また、住居址3と同じような柱を支える石が柱穴から見つかりました。



住居址5

南北の辺、約5mの方形の住居です。西半分は未検出であるため、東西辺の長さはわかりませんが、調査地西壁付近で建物の中心に立っていた柱の穴と思われるがものが見つかっており、そこから復元すると東西辺はおよそ6mとなり、長方形を呈していたと思われます。1重の周溝を巡らせます。

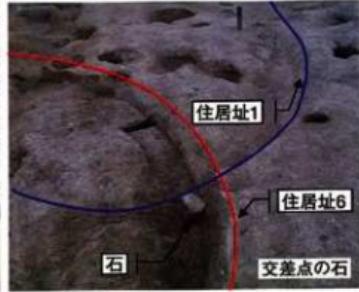


住居址6

直径約8mの多角形となる住居です。大型建物4とかなりの範囲が重複していたため床面をすべて掘下げることができたのは、調査終了の直前でした。床面は地山面を50cmほど掘下げ、薄く粘土を張っていました。建物中心の2ヶ所に炉跡があり、そこからそれぞれ住居址外に伸びる2条の溝も認められました。炉跡から石包丁の破片が出土しています。周溝は1重に巡らせています。住居址6は住居址1とともに一部重複していて住居址1のほうが新しいようです。住居址1と住居址6の周溝の交差する部分で6の周溝の堤上から大頭大の石が出土していて、住居址1を作る際、肩が崩れないように埋め込まれたものと考えられます。



住居址6全景
(南東より撮影)



住居址1

住居址6
交差点の石



炉からのびる溝



炉跡出土の石包丁

住居址7

大型建物1東端部と重複して検出された、直径5.4mの円形の住居址です。大型建物1の4つの柱穴が住居址上にあり、床面の調査は部分的なものとなりました。また、住居址北半は近世の溝に、東端は自然流路と現代の溝によって、西端も現代の溝で削られています。南半の部分的な掘下げで、地山を約30cm掘下げて床面とし、1重の周溝を巡らせていたことがわかりました。



住居址7全景(南東より撮影)



住居址7全景(北より撮影)

住居址9

住居址7のすぐ南で検出された円形住居址です。全体の約4分の1を検出しただけで、正確な大きさはわかりませんが、おそらく8mほどになると思われます。この住居址は、これまで説明したきたものとやや構造が異なり、周溝の内側に周堤と呼ばれる土手状のものが、その内側にさらに2重の周溝を巡らせます。住居址の床面は、周堤より20cmほど掘下げて設定されています。



住居址9全景(東より撮影)

住居址10

調査区北東端の緩斜面上で標高の最も低い地点にて検出された円形の住居址です。南半分のみを確認しただけですが、その直径はおそらく8mほどになると見られます。地山面から30cm掘り込んで床面としています。この住居址では周壁溝と呼ばれる、法面の崩落を防ぐため床面を若干掘り込んで、法面に板材等を張り付けた痕跡を確認しました。周溝は一部2重となっています。住居が廃絶した後、周溝のくぼみに割れた土器をまとめて投棄していました。



住居址11

住居址10の西隣で検出した、円形の住居址です。削平を受けていて、西半の周溝がかろうじて残っていました。周溝は部分的に2重で直径は8mほどと思われます。住居址のほぼ中央の穴からは、据えた状況の弥生土器の底部が出土しています。



住居址13

周溝と思われる溝は西端と南端の一部を確認したに過ぎませんが、おそらく直径8mほどの円形住居址だらうと思われます。住居址の中央と見られる部分で炉跡と思われる炭化物を埋土に多量に含む穴が見つかっています。また、住居の埋土中から直径30cmにもなる高杯の杯部がほぼ完形のまま出土しました。



住居址14

住居址13の南西に位置する、一辺およそ5mの正方形を呈する住居址です。地山面を約10cm掘下げ床面とし、1重の周溝を巡らせます。南辺の中央は1mほど張り出し、ここが出入り口ではないかと思われます。北東角が住居址13と重複していて、住居址14のほうが新しいことがわかりました。住居址の埋土中から土師器の壺と把手が出土しました。



住居址15

住居址13の北側に位置する方形の住居址です。後世に溝が掘削されたため南辺は確認できません。住居は使用途中で拡張されたか、あるいは、住居内を区画したのか、西側の周溝は1.5mほどの間隔をおいて2重に巡っています。南辺が、わからないため南北方向の大きさは不明ですが、東西はおよそ4.5mです。周溝の水は北東隅から排出したようです。

住居址20と住居址21

大型建物5南端で重複する位置に検出された住居址です。北側の方形のものが住居址20、南側のいびつな円形のものが住居址21です。住居址21は東西辺3.6m、南北辺5mの長方形を呈します。周溝は部分的に2重に巡り、西側の斜面に排水を流すように北西、南西の隅に排水用の溝が掘られていました。床面は、地山を10cmほど掘下げて作られていきました。住居址21は東端が調査区外に出ていますが、直径約6mです。こちらの周溝も部分的に2重に巡っています。住居址の中心に炉跡があり、そこから西側の斜面に溝が掘られています。この2つの住居址はごくわずかに切りあっていて、住居址20のほうが新しいのですが、周溝を一部共有したような状況が認められたため、ほとんど時間差なく存在したようです。



住居址20(右)と住居址21(左)の全景
(東より撮影)



住居址21の炉跡と斜面に伸びる溝



炉跡の半断面状況

